

『聖書はどこから来たか——東洋からの思索』

久保田展弘(著)／新潮社／1700円＋税／2000年

人間にとって宗教とは何か

坂田三允(長野県看護大学)

かれこれ40年も前のことになる。「ピラミッド」という映画を見た。話の筋はほとんど覚えていないのだが、亡くなった王の埋葬の日、殉死を逃れようとする王妃が、神官のひとりが抜いた1本の楔によってさらさらと零れ落ちてくる砂のなかに埋まっていく、という最後の場面だけ鮮明に記憶に残っている。いつかピラミッドを見たいとずっと思っていた。この冬、瓢箪から駒が出るようにまったく偶然にエジプトに旅することが可能になって、知人から勧められたのがこの書である。

もちろん、この書は題名の示す通りエジプトの専門書ではない。比較宗教思想・文化論を専門とする著者の、「聖書にゆかりの地を歩くことによって、あらためてユダヤ教、キリスト教、そしてできればイスラームが打ちだしてきた神の認識と、それが導いてきた人間の行動について考え」るための旅の記録、そして、さまざまな地であって揺らぎつつ深められていく思索の流れの記録である。モーセに率いられたユダヤ民族の「出エジプト記」の記述にしたがって、著者の旅はエジプトからはじまる。が、帯封に「シナイ半島からイスラエル北端の聖地へ、聖書誕生の地をひたすらに歩く…。多神教世界から唯一の神への思索の旅」とあるように、著者の旅はイスラエルに重点が置かれている。

そして私も、この書に導かれてシナイ半島をめぐることに決めた。林立する赤茶けた岩山に取り巻かれたセント・カテリーナ村、その岩山の1つシナイ山の山頂で「少なくとも日本とは

全く異なる自然風土を」感じ、「ここでは自然に帰れとか、自然にしたがって生きようという促し自体が、現実的に意味をもたない」ことを実感する。そして、イスラエルとの国境タバで、あらためてイスラエルとアラブの長い長い戦いを、人間にとって宗教とはいったい何なのかを考える。アブラハムという共通の宗教的祖先を持ちながら、なおそれぞれが自分たちの神を唯一の神と主張する複雑さ。

生け贄として息子を要求するほどに強烈でありながら、姿も見せず名もわからない神とはいったい何なのか。「神と仏との融合のなかで、排除の思想をもたない神とか仏、そして宗教を考えてきた私にとって(中略)『アッラーはその権能限りなく、恐ろしい復讐の神におわします』といった言葉に、私は率直に戸惑いをおぼえる」という著者の思いは、私の思いに重なる。見えない神は観念でしかありえないだろう。わが息子という現実よりも観念を優先させるほどの力を持つ宗教、そして宗教を信じるという人間の心の営み…。

イスラエル北部の港湾都市カイザリアで著者の思索の旅は終わる。「現代であってなお宗教が、人々に生きることを促す意味をもつとしたら、それは互いに異なることを指摘し合い、対立の構造を描いて見せる、排除する力にではなく、包容する勇気を生みだす力にこそあるのではないか」という著者の言葉に頷きつつ、神とは結局のところ、自分自身の基盤、自我の核、そのようなものなのではないのかと思う。▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院(精神科婦長)を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著者も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694